群教セ	G01 － 04
	令4.281集
	国語－高

高校国語において、読み手の立場から自らの文章をよりよくすることができる生徒の育成

――匿名性を保障しながら他者の意見と出会うことのできるアプリの活用を通して――

特別研修員　瀧本　大仁

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

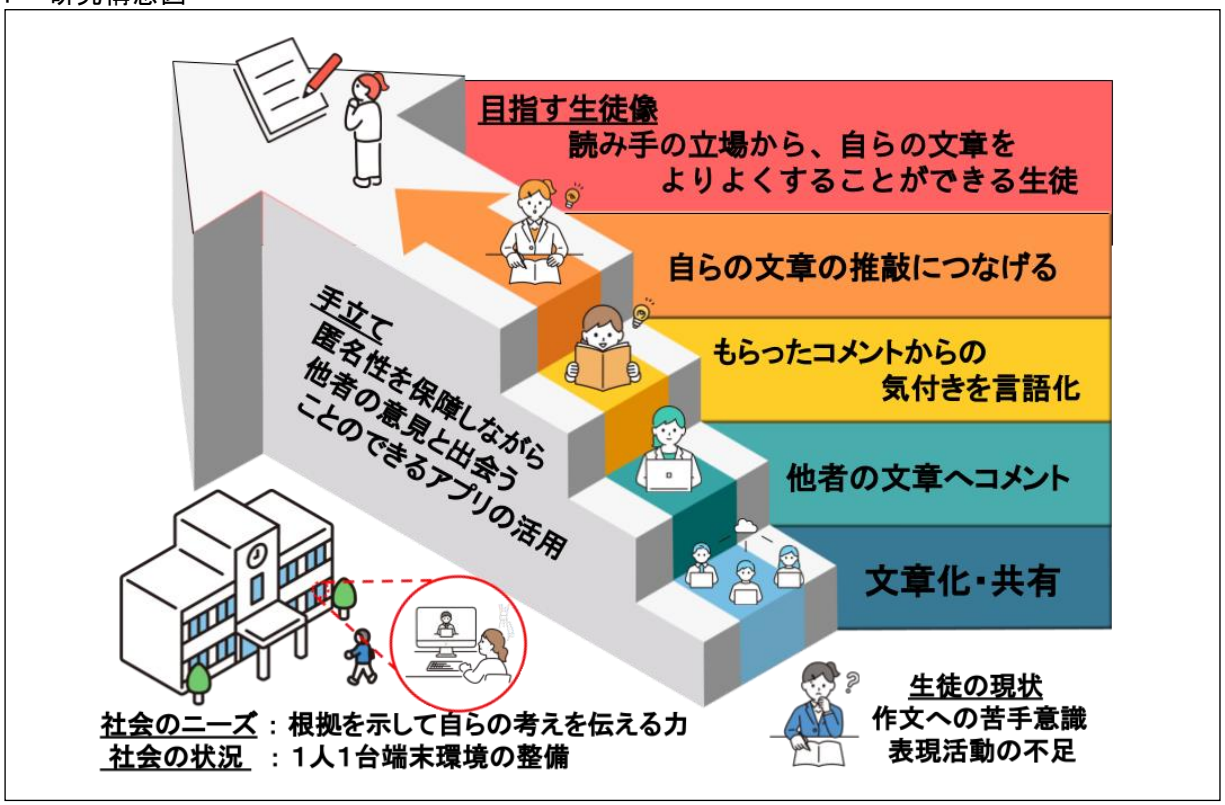
現代では、情報化と国際化によって価値観が多様化する中で、論理的に自分の考えを伝える能力が求められていると言える。ＯＥＣＤによる国際的な学習到達度調査「ＰＩＳＡ2018」の結果では、日本の学習者は「自分の考えを他者に伝わるように根拠を示して説明することに、引き続き課題がある」ことが明らかになっている。こうした課題に対し、国語科の「書くこと」の領域が果たす役割は大きい。

研究協力校の生徒は、作文や記述問題に苦手意識をもつ生徒が多い。文章を書く指導を行う際にも、自らで様々な角度から検討しながら文章を書き進めることに難しさを抱える場面が多く見られた。そうした背景には、自らの文章に対して他者から様々な観点でコメントをもらい、書き直す経験の不足と、読み手の立場から文章を捉え直す意識の欠如があると考えられる。

そこで、手立てとしてグループワーク用アプリケーションを用い、クラスメイトの文章を相互に読み、コメントをし合う活動を設定した。その際、文章とコメントは共に匿名とすることで、積極的な意見交換を促した。その後もらったコメントの内容や、コメントをする中で学んだことを基に自らの文章を書き直すことで、読み手の立場から自らの文章をよりよく書き直すことができる力の育成を目指していく。

Ⅱ　研究内容

1　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

手立て　匿名性が保障されるアプリを活用して、他者と意見文を読み合いコメントをし合うとともに、そのコメントを基に文章をよりよく書き直す活動

匿名で記入が可能なグループワーク用アプリケーションを活用して互いの意見文を共有し、それを読み合ってコメントをし合う活動を設定する。コメントをし合う活動の中での気付きや、自らの文章に寄せられる様々な観点からのコメントに触れることで、読み手の立場に立ち、自らの文章をよりよく書き直すことができるようにする。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　文章に匿名でコメントをし合う活動を行うことで、普段の学力差や人間関係に影響されることなく、自らの気付きを率直にコメントにしようとする姿勢が見られた。加えて、匿名の文章を読むことでテキストそのものの情報や論理性に注目することにつながり、「書くこと」の指導に焦点化した活動を実施することが可能であることが示唆された。

○　アプリ上でのコメント活動によって、リアルタイムで自らの文章に対する意見等を得ることができ、その意見等に応えようと自分の文章をよりよく書き直すことへの必要感を高めることにつながった。クラスメイトからもらったコメントが契機となり、読み手の立場から自らの文章を読み直すことにつながり、改善すべき文や言葉が強調され、個々の問題意識を高めたと考えられる。

○　自分の文章に付けられた多様なコメントから、文の長短、接続関係の捉え直し、具体と抽象の調整など、それぞれの文章に応じた気付きがもたらされ、それを書き直すことにつながった。この活動を通じて、個々の文章技術に応じた学習の個性化を図ることができたと考えられる。

２　課題

○　アプリ上で交わされたコメントの多くが、文章の構成、情報の重要性などの大きな文章構造に対する指摘ではなく、言葉遣いや文の長さなど、一文単位での指摘であった。今回の実践では前半に具体例、後半に主張と、文章を構成する方針がはっきりとしており、ほぼ全ての文章がその条件に合致していたため、コメントの方向性が文単位に集中したものと考えられる。今後は、文章構成の自由さを保障した上で実践することが望まれる。

○　相互のコメント活動を行った後、自分の文章に寄せられたコメントの妥当性についての検討が不足してしまったため、熟慮することなくコメントどおりに自分の文章を直す生徒が見られた。今後も実践を重ね、生徒同士で行われるコメントの質を底上げしていく指導の必要性が明らかになった。

実践例

１　題材名

「不均等な時間」（内山節）　第一学習社　（第１学年・２学期）

２　題材について

「不均等な時間」は、哲学家である内山節による評論文である。この評論文は、豊富な具体例を挙げつつ、上野村の人々と隣村の人々の暮らしを対比的に捉える前半と、近代の自然環境が、近代的な時間世界を自然にもち込んだことに起因して発生したものとしてその問題点を指摘する後半からなっている。本実践では、この本文構成を、前半部を「具体例」、後半部を「意見」と大別することで、意見を述べる際の文章構成を学ぶ題材として扱い、「書くこと」の指導における文章作成の際のモデルとして活用した。単元の前半では、本文の読み取りを行った上で本文の構成を確認し、単元後半でその構成を使った文章を作成する活動を設定することで、ある構成を基にして文章を書く力を育成する。さらに、その作成した文章に、アプリによってコメント活動を行うことで、自らの文章を様々な観点から見直すことにつながり、読み手の立場に立ち、よりよく書き直すことにつながると考える。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し、実践を行なった。

目標	(1)　文、話、文章の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解し、適切に用いることができる。【知識及び技能】 (2)　読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度などを考えて、文章の構成や展開を工夫することができる。【思考力・判断力・表現力等】 (3)　言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会と関わろうとする。【学びに向かう力、人間性等】
評価規準	(1)　文、話、文章の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解し、適切に用いることができている。（知識・技能） (2)　「書くこと」において、読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度などを考えて、文章の構成や展開を工夫することができている。（思考・判断・表現） (3)　進んで書き言葉のもつ特徴や役割についての理解を深めるとともに、学習の見通しをもって論理展開や情報の重要度に基づいて文章構成を工夫しようとしている。（主体的に学習に取り組む態度）

過程	時間	主な学習活動
つかむ	第１時	・「不均等な時間」を通読し、語句の意味や内容について考える。
追究する	第２・３時	・「不均等な時間」の内容を基に、伝統的な暮らしと近代的な暮らしの二項対立や、時間の合理性がもたらす自然への影響を考える。
	第４時	・本文の構成についてまとめ、その構造を使い、社会問題に対する自らの考えをアプリケーションを活用して文章にまとめる。
まとめる	第５時（本時）	・自らが書いた意見文をアプリケーションで共有し、コメントをもらうことを通して、読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度などを考えて、文章の構成や展開を再検討する。
	第６時	・コメントを基に、文章をよりよく書き直すことで、文章全体を整え、自分の文章の特長や課題を捉え直す。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全６時間計画の第５時に当たる。本時のねらいは、自らの文章にコメントをもらい、読み手からの意見に触れることで、文章の構成や展開を再検討することである。それを達成するための手立ては以下のとおりである。

手立て　匿名性が保障されるアプリを活用して、互いの文章にコメントをし合う活動の設定

匿名で記入が可能なグループワーク用アプリケーションを活用し、前時までに各自の意見文を記入し、互いに文章を一覧で見ることができるようにしておく。本時においては、コメントの観点を五つ設定・共有し、それらの観点から互いにアプリケーション上でコメントを付け合うことで、読み手の立場から自らの文章をよりよく書き直すことを目指す。

４　授業の実際

(1)　前時まで

前時までの授業で、生徒は「不均等な時間」における対比表現に加え、前半部が具体例、後半部が主張となっている本文構成について学んだ。その構成を基に、環境問題やジェンダー論などの自由なテーマで、社会に対する意見文を書く活動に取り組んでいる。作成した意見文は、原稿用紙ではなく、全てアプリケーション上に公開情報として記入させた。そうすることで、文章作成に苦手意識がある生徒も、他の生徒の書いた内容を活動途中に間接的に参考にすることができ、作業の大幅な遅れは軽減されている様子であった。なお、意見文のテーマや取り上げる具体例は各自で決めさせ、他者の書いた意見文をそのまま利用するようなケースは起こらないよう配慮した。

(2)　授業前半

授業前半では、まず開始時に前時の振り返りを行い、書いた文章の内容や、その構成について確認させた。その後、本時のねらいを示し、本時のコメント活動は自らの文章をよりよくするための気付きを数多く得るためのものであることを周知した。そのねらいを確認した上で、以下五つのコメントの観点を共有した。その内容は、「①具体例―主張の関係になっているか」、「②展開を考えて、不必要な記述はないか」、「③具体例と主張の内容が合致しているか」、「④漢字ミスはないか」、「⑤その他」、の五点である。コメントの観点を共有することで、こうしたコメント活動に慣れていない生徒にも取り組みやすさを保障するとともに、文章を見る際の観点が拡散しすぎてしまわないよう配慮した。その後、どの文章を読むかをくじで決め、担当となった文章にコメント活動を行なった。生徒はその中で、観点を基に文章構成や記述の適切さに着目しながら活発にコメント活動に取り組んでおり、担当した文章に10個近くのコメントを残す生徒もいた（図１）。生徒のコメント活動はリアルタイムで画面に反映されるので、活動中に優れたコメントを取り上げ説明を加えたところ、そのコメントを注視するなどして、自らの活動につなげていることが確認できた。

図１　前半部、コメントを付ける活動の様子

(3)　授業後半

授業後半では、自分の文章に戻り、付けられたコメントを読んで気付いたことをまとめる活動を行った。生徒は自らの文章に付けられたコメントが、①～⑤のどの観点に当てはまるかをワークシートに記入するとともに、活動を通して得た文章改善のための気付きを記入した。ワークシートからは、自分の文章へのコメントを読んだことで、自分では気付かなかった問題点に気付くことができたり、読み手の立場から見た読みやすさや論理性を意識したりしている記述を、38 名中 31 名から見取ることができた。具体的には、「句読点の位置など、打っていて自分では気付かなかった」といった気付きや、「自分で書いているときは違和感がなかったが、読み返してみると確かにそうだと思った」などの記述が確認できた。ワークシートの記入後、グループになってその内容を共有

し、次回の推敲活動へとつなげた。その中で生徒は自らの文章に問題点を共有するとともに、それを解決するための改善方法を積極的にグループの中で協議していた（図２）。

図２　後半部、コメントからの気付きを共有する様子

また、授業の終盤では、生徒が「先生、コメントで一文が長いと指摘があったのですが、この文を短くする方法が分かりません。どうしたらいいのでしょうか」と教師に質問をするなど、自分の書いた文章の問題点について、強く解決したいものとして生徒が向き合っている姿が見られた。実際に、本時の後に行った推敲の時間でその生徒が書き直した文章では、複数の要素が並ぶ長い一文を、「第一に、…。第二に、…。」とナンバリングして複数の文に分けるようにするなどの工夫が見られた。他の生徒では、文章の展開に合わせて「しかし」や「また」といった接続語を追加したり、「いろいろな問題」とだけ書いた抽象的な記述を、「地球温暖化や大気汚染などの環境問題」と具体化したりするなど、読み手の立場から文や構成を考え直している様子が見られた。他者からコメントをもらうことによって、個人個人の文章が抱えるそれぞれの課題に気付きつつ、文章の推敲を行うことにつながっていたと言える。

５　考察

本実践では、題材「不均等な時間」を、「書くこと」の領域に焦点化して扱った。その結果、生徒は率直に自らの見方・考え方を基にしたコメントを出し合うとともに、自らの書いた文章に対して積極的に問題点を見付け、読み手の立場からよりよく書き直そうとする姿が見られた。

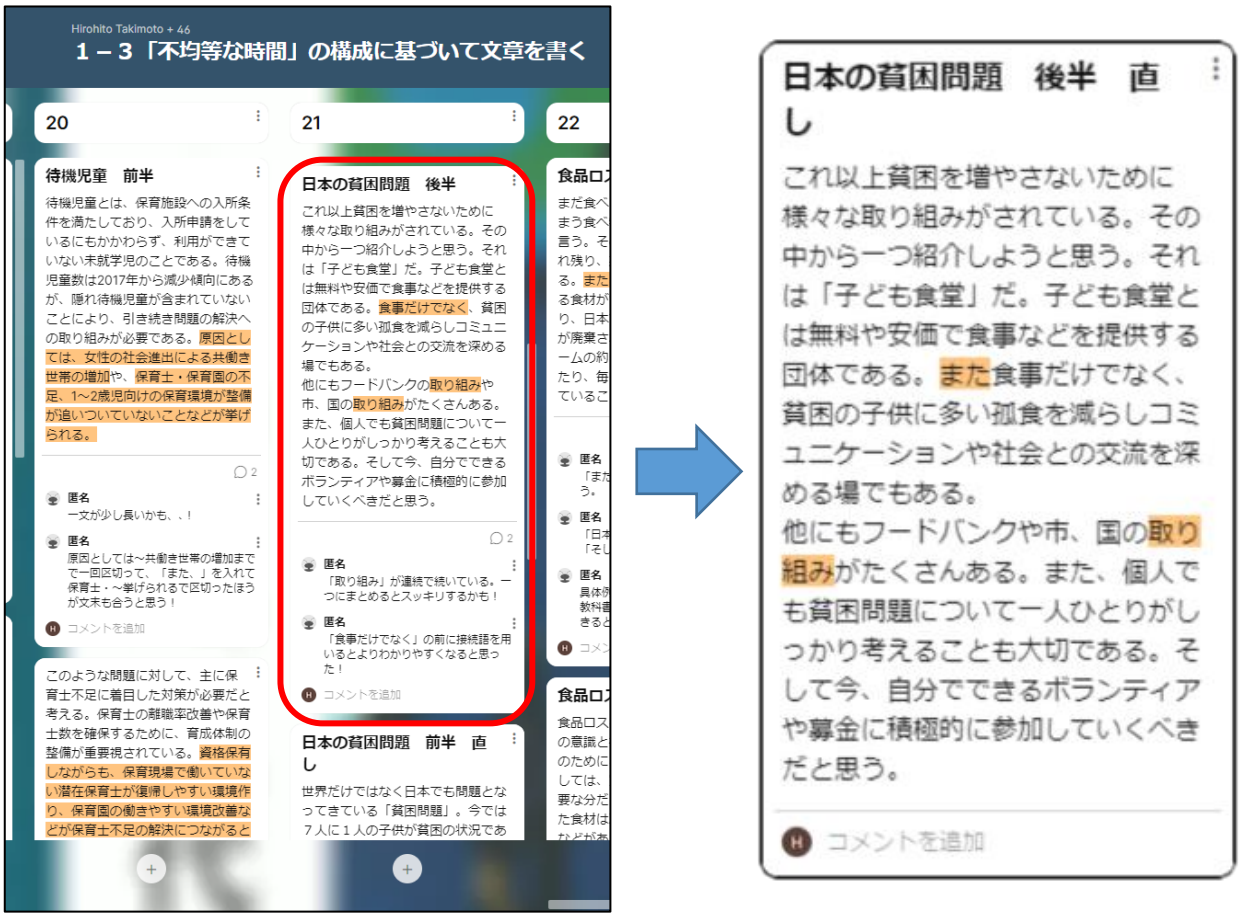
生徒が率直にコメントを出し合うようになった要因としては、今回設定した匿名性によって意見が書きやすくなったことが挙げられる。協力校では、普段の授業では互いの考えや文章について批判的な意見を言うことが少なく、意見交換をしても受容するのみに留まってしまうことが多い現状があった。そこには、他者を思いやるあまり、改善点を指摘することをはばかる心情が背後にあったと考えられる。しかし、今回の実践では、文章の書き手にも、コメントをする者にも匿名性を保障したことにより、自分なりの見方から文章の表記・構成・論理性の改善点をコメントによって伝え合うことができるようになった。また、コメントを付ける生徒からすると、文章の書き手についても匿名となっていることで、書き手についての情報がそぎ落とされ、書かれているテキストそのものの内容や論理性に着目しやすくなり、コメントを付けやすくなったという要因も考えられる。

また、「４　授業の実際」でも記入したように、授業後半部で自分の書いた文章の問題点について、解決しようとする強い意識をもつ生徒が見られた。それは、本時の活動においてリアルタイムで交わされたコメントに基づいて自らの文章を読み手の立場から見直し、不自然さを強く意識したことから生じたものと思われる。

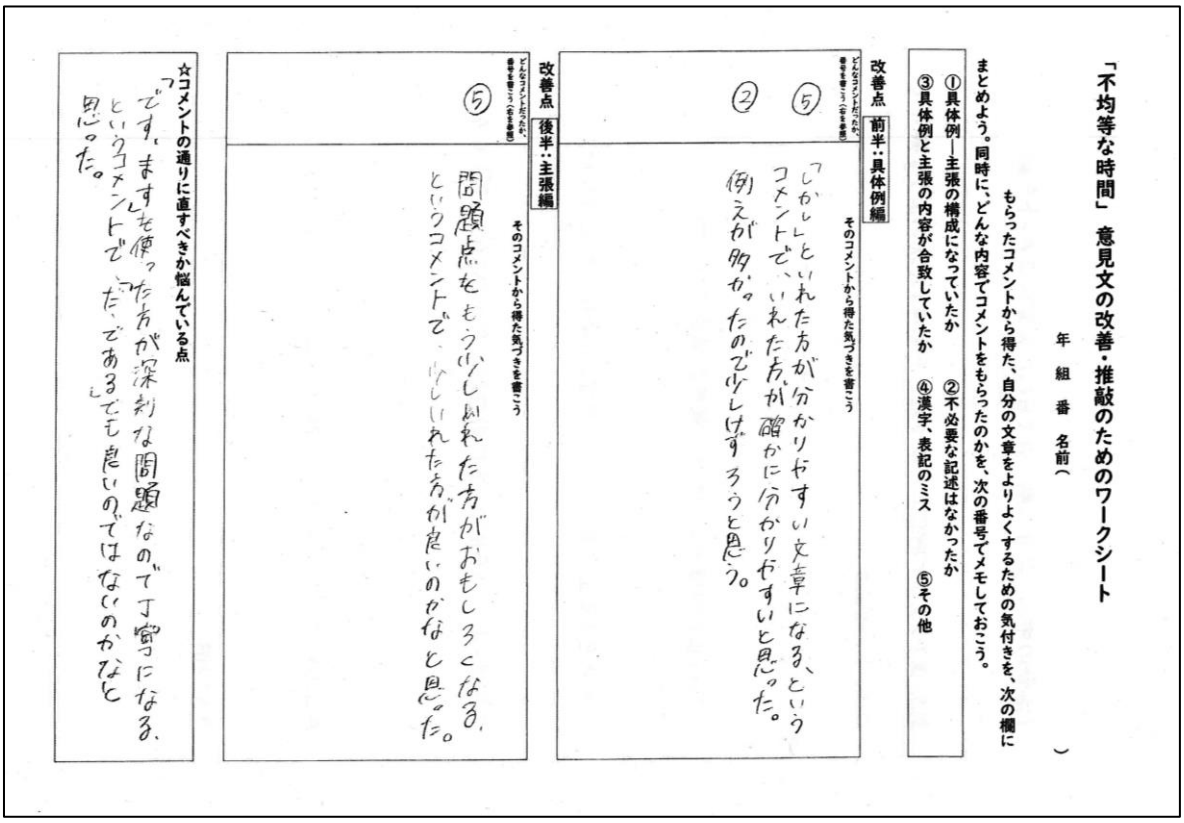
課題としては、アプリケーションの使用により活発にコメントを出し合うことはできたが、そのコメントの内容の半分以上が、表記や言葉遣いといった、一文単位での指摘となっていたことが挙げられる。本時での全 147 コメントのうち、一文単位での指摘をしているコメントは 81 個であった。反面、文章全体の構成に対するコメントや、具体例と主張が適切にかみ合っているかなどについてのコメントは 16 個であった。今後の活動では、文章構造に対して指摘を行っているコメントをモデルとして活動前に取り上げ、段落構成や論理展開などに更に着目をさせ、大きな構造を捉えて指摘を行う能力を高めていくことが、書く能力の育成につながると考える。

また、本時後半で取り組んだワークシートの左側には、コメントの指摘どおりに直すべきか悩んだ部分について書く欄を設けたが、そこに対する記述は38名中24名が「特になし」又は空欄となった。ここから、もらったコメントを基に自分の文章を直そうという意識は見られたが、もらったコメントの妥当性について吟味し、そのコメントの指摘に妥当性があるかを検討する姿勢が十分でなかったことが考えられる。今後はもらったコメントを契機とし、更にそのコメントの妥当性を検討するような時間をしっかりと保障することで、書く能力の発展性が望めるのではないかと考えた。

6　資料



本実践で用いたグループワーク用アプリケーションによる、実際のコメントと推敲の例



「不均等な時間」意見文の改善・推敲のためのワークシート

年　組　番　名前（　　）

もらったコメントから得た、自分の文章をよりよくするための気付きを、次の欄にまとめよう。同時に、どんな内容でコメントをもらったのかを、次の番号でメモしておこう。

①具体例―主張の構成になっていたか　②不必要な記述はなかったか
③具体例と主張の内容が合致していたか　④漢字、表記のミス　⑤その他

改善点　前半：具体例編

どんなコメントだったか、番号を書こう（○を多数）　⑤　②

そのコメントから得た気づきを書こう

「しかし」といれた方が分かりやすい文章になる、というコメントで、いれた方が確かに分かりやすいと思った。例えが多かったので少しけずろうと思う。

改善点　後半：主張編

どんなコメントだったか、番号を書こう（○を多数）　⑤

そのコメントから得た気づきを書こう

問題点をもう少しいれた方がおもしろくなる、というコメントで、少しいれた方が良いのかなと思った。

☆コメントの通りに直すべきか悩んでいる点

「です、ますを使った方が深刻な問題なので丁寧になる、というコメントで「だ、である」でも良いのではないかなと思った。

授業後半で用いたワークシート（記入例）